

## はじめに

本重点領域研究の研究項目「総合的地域研究の概念」とは、地域研究のあり方を全体としての「世界」との関連において新たに構想し、その手法のあるべき姿を提示しようとするものと理解される。そこで、その一翼を担うべく我々は、地域研究とは他者認識の一形態であるとの観点から、「地域研究の成立」という題目の下に次のような研究目的を設定した。すなわち、世界の諸地域でこれまでなされてきた個々の研究の内容を単に個別的にレビューするのではなく、それらを総体としてとらえ、そのような研究の背後にある地域認識の枠組みを知識社会学および歴史社会学的な視角から考察することである。

そのために我々は、特定の時期における特定の認識主体と認識対象地域（～時代の～による～地域の研究）を一つのセットとしてとらえる観点から、これまでの地域研究における地域認識の枠組みを抽出することをめざした。もちろん、このような意味での地域認識の枠組みは単一ではない。多くの事例をとりあげることによって、地域研究における「地域」観を析出しなければならない。しかもその際には、検討対象としての地域研究を狭い意味での学問的研究に限定せず、植民地経営の事例など、政策的対外認識の所産をも視野に取り込む必要がある。これによってはじめて、地域研究成立のダイナミクスを解明することが可能となろう。そこで我々はまず、以下のような代表的事例の研究に取り組んだ。日本のアジア研究（アジア研究とアジア主義との関連、日本による朝鮮認識、在日韓国・朝鮮人問題、日本によるチベット認識など）、新旧植民地時代の地域研究（アメリカによるフィリピン認識、オランダによるインドネシア認識、フランスによるインドシナ認識など）。

しかしながら、これらの個別研究を通して抽出されたものを列挙するだけでは不十分である。我々の研究は、地域認識の枠組みの成立そのものを問題とすることによって、「世界認識の枠組みの変遷」の解明にまで到達しようとするものだからである。そのためには、これらの地域認識枠組みを時系列においてとらえ、地域認識の枠組みが「いかに」変化したかという問題と、「なぜ」変化したのかという問題の双方に留意しつつ、それらを「世界認識の枠組み」に総合するという作業を行う必要がある。しかもその場合、認識主体と認識対象地域の関係を固定的にとらえず、認識の成果（＝地域研究報告）が政策などに反映されることを通して、認識の対象（＝地域）を変化させる状況にも敏感でなくてはなら

ない。〈「地域」は内世界と外文明とが交錯する中で形づくられる〉とするなら、内世界に影響を与える外文明の一つとして地域研究自体をとらえる必要性が存在するからである。

本報告書に収められた各論文は、いずれも以上のような問題意識のもとに書かれた。残念ながら種々の制約により上述の課題のすべてに十二分に応えきることはできなかったが、様々な角度からのアプローチが切り取った諸断面の総体として浮かび上がってくるであろう「地域研究の成立」という主題の立体像を、ここに読み取っていただければ幸いである。

なお、執筆者の氏名・所属は下記の通りである（掲載順）。

筒井 清忠（京都大学文学部）

吉川 洋子（京都産業大学外国語学部）

小川 伸彦（奈良女子大学文学部）

寺岡 伸悟（熊本大学文学部）〔研究協力者〕

野崎 賢也（京都大学大学院文学研究科）〔研究協力者〕

廣池 真一（京都大学文学部）〔研究協力者〕

1996年1月

研究代表者 筒井 清忠